

# 木橋梁巡礼 3

|| 或る建築家の見たる復興橋梁 ||

A さん. B さん

## 8.....築地橋の.....續

A さんは成が高く、B さんは反對に成が低い、二人も同じなのは大きな口を最一つは御婦人の方にお聞かせ致したくないのですが、すこぶる口の悪いことである。その二人があたりに人の氣もない築地橋の上に立つたのだから遠慮はない。ぢりぢり焼けるやうな陽の下で相變らずしやべつてるのである。

「さうも、しかしこの橋は堅苦しい」

「何んだか、肩をぎゆうぎゆう締められるやうだな」

「親爺か、課長殿の御前でもまかり出たやうな氣持だね」

「そしてこの、たもこの欄はいかなものだらう。一體ちつとも調和してゐない」

「うん、これはさの橋でもやつてゐるよ。まあ三分の二は橋さ、この袖は兄弟喧嘩してゐるやうに不調和である。設計は同じ人なのか知ら?—— 違つてたつて、一寸考へりや分る筈だがな」

「氣がきいたつもりで、かうするのも知れない。そして、この柱のぎざぎざも誰もがやりたがるものに見える」

## 9.....新龜島橋

「この橋の行方は出雲橋に似てゐる」

「これもライトの影響を受けてゐるね」

「この欄干の格子はさう思ふね」

「もつともまづいものと思ふ。材料の使ひ方を知らぬものである。アーチの弧と欄干の弧は全々相反するものと思ふ」

「いやしかし僕はさうまで悪いとは思はないね。こりや當然さうなるべきものだよ」

「いや。いかん」

「これでいゝよ、部分的ぢやないよ」

「然しこの作者は無意識ではあらうが、柱を側へ寄せたのは成功であらう」

「これは僥倖さいふものであらうが、他の作者の學んで良いことであらう」

「袂のそでもいゝと思ふ」

「たしかに他のものよりは良い。しかしこの橋だけがぐんぐん優れて居るんぢやないよ。他の橋が全く不調なものを喰付けてあるに反してこの作は橋と調子を合せたので、すこぶる見立つた譯である」

「新橋も調子は合つてゐたね」

「日本橋もさうだつた。—— しかし新橋や日本橋のやうに老練さはない。全體の調子は他の橋に見られぬものであるが、全體の様式の不統一さが目につく、シカゴ式ならシカゴ式、表現派ならそれと一様式であつてほしい。あまり雑多な様式が入混つてゐる」

「その作者はまだ若い人だらう。もつともつこ仕こなさねばなるまい」

「しかし良い素質の人だと思ふ。電燈など新橋のやうに分離しないから五個の電燈を一個にして見せた手際などは成功さ云へやう」

「電柱の脚部は——」

「最少し力強さを見せてほしいと思ふ」

「欄干に電燈を仕つけたのは珍しいな」

「誰でも一寸考へることだけれども誰もやらなかつたことだらう。實際この橋だつて不成功ぢやないか」

「高いところのものさ手の届く所のものさ同一に取扱のが悪い」

「悪いもなにも、一體日本のものは一寸氣が利いてゐるがすぐ毀れて了ふものが多い。その作でもまるでブリキ細工見たいぢやないか硝子だつてもつこ厚くしなくちやあ不可ないことは誰れだつて分る事ぢやないか」

「いや分りました。以後氣をつけるよ。ハ、ハ、」